

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 67 No. 2 2015

主幹 新里 眞男

巻頭言

研修会に行こう、勉強会を作ろう

前東京都港区立赤坂中学校教諭 ● 北原 延晃

1月末の鹿児島セミナーで講演会回数が400回に達した。記録をひもといてみると第1回は1994年とあるから20年間で達成したことになる。平均して年間20回のペースか。今年度は過去最多で54か所を巡った。教委、中英研、自主と主催者は違えど、参加者の先生方は何かをつかんで帰ろうと熱心に参加している。いくつかの地区は参加者の評価や感想を送ってくれる。書かれていることは「目からウロコが落ちた」「自分がやってきた授業とまったく違った」「もっと早く話を聞けばよかった」という内容が多い。中でもいちばん高評価だったのは、ある県の高英研だ。満足度5段階中、5が86%、4が14%、3以下はゼロだった。その理由が記述されていたが、まとめて言うと「こんなに中学生ができるとは知らなかった」ということだ。若い先生方も多かったが、みな同じように「明日から授業改善する」と決意が書かれていた。

若い頃の私にもそのような出会いがあった。ただそのときの熱情を保ち、地道に授業改善に取り組むのは並大抵の努力ではできない。私には切磋琢磨する仲間の英語教師がまわりにたくさんいた。授業を見せ合い、情報を交換し、理想の授業に近づく。1人では難しい。仲間がいたからこそ、たゆむことなく続けられたのだと思う。

先生方にもぜひそのような仲間をたくさん作ってほしい。アンテナを高く張っていれば必ず出会えるはずだ。まずはさまざまな研修会に参加しよう。そこで知り合った人たちとメールなどでつながっておこう。授業改善が少し進んだらまた研修会に行こう。今度は知らないことを知るのではなく、自分のやり方が正しいのか確認するために行くのだ。こういう研修会参加は楽しい。さらに実践を仲間と共有しよう。できれば同じ地区の先生方と小さい研究会(勉強会)を立ち上げるとよい。私が2004年に立ち上げた自主研究会である「北研」(英語基本指導技術研究会)は今では9つの支部をもつ(高知、宮崎、長崎、茨城、鳥取、熊本、静岡、富山、広島)。お近くの方は足を運ばれると勉強会の運営についてヒントが得られるだろう。

豊かな心を育てる Sunshineの題材



北海道札幌市立札幌中学校教諭
大塚 謙二

1年生編

平成28年度版の新しいSUNSHINEには、多くの支持を得た平成24年度版をよりいっそう生徒たちにとってわかりやすく、先生たちにとって使いやすくなるためのアイデアを盛り込みました。今回は1年生の題材内容について、そのねらいや魅力をご紹介します。

Program 7: The Wonderful Ocean

世界自然遺産である北海道知床半島近海の、オホーツク海から釧路の太平洋に定住するシャチの家族に触れ、赤ちゃんシャチがお母さんを追いかけている様子や生態について取り上げています。また、イルカウォッチングが盛んな室蘭市の内浦湾で子育てをするイルカについても鯨類研究者の笹森琴絵さんが撮影した躍動感あふれる写真とともに読み進めていきます。この課はシャチやイルカの家族愛やそれを取り巻く北海道の自然環境の素晴らしさに触れることで、自然を大切にす気持ちを再認識してほしい題材です。

Program 7-1までの本文はすべて対話文で構成されていますが、7-2では初めての説明文になります。生徒たちのシャチやイルカへの興味を高め、自然と読みたい気持ちにさせて、英語を読んで理解できた喜びを感じてほしいところです。また、インターネットで関連する情報や動画を見つけて生徒に提示し、自然・環境についても考えさせたい教材です。



1年p.73

Program 8: Origami

たった1枚の紙から、美しい花、躍動感のある動物など、さまざまなものを創り出すことができる折り紙。今では国境を越えてORIGAMIという世界共通語になるほど親しまれています。本課では、日本折紙協会のマスコットNOAちゃんを紹介したり、昼休みにウッド先生が鶴を折ってみせたり、折り紙に興味をもつきっかけとなったエピソードを紹介したりします。

セクション1の本文は、大介が英語の授業でNOAちゃんを紹介するShow & Tellになっています。これは、次のMy Project 2「人を紹介しよう」につながる内容なので、そのモデルの提示にもなっており、内容理解から暗唱につなげるとMy Projectの事前練習にもなります。



1年p.79



1年p.81

また、本課の教材研究の際には、ぜひ日本折紙協会のホームページを検索してみるとよいでしょう。本文に登場するNOAちゃんの折り方も紹介されていますし、東京おりがみミュージアムのサイトでは素晴らしい作品を閲覧できますので、それらを授業で活用することで、いっそう本文を魅力的に展開できるでしょう。本課を通して生徒に、折り紙という日本の伝統文化に誇りを感じてもらいたいものです。

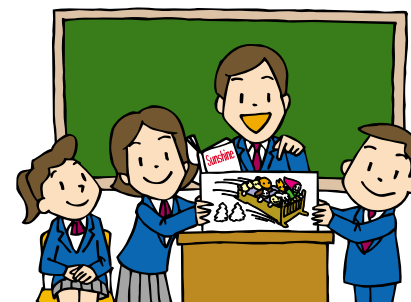
Program 11: Grandma Baba and Her Friends on a Sleigh

生徒たちが小さかった頃、よく絵本で目にした懐かしい「ばばあちゃん」。その名前を忘れていた生徒でさえ「あ、なんでも解決してくれるばあちゃんのお話だ!」と絵を見て思い出します。

ここで取り上げる話は、あるとても寒い冬の日の出来事。ばばあちゃんを慕っている森の動物たちが凍

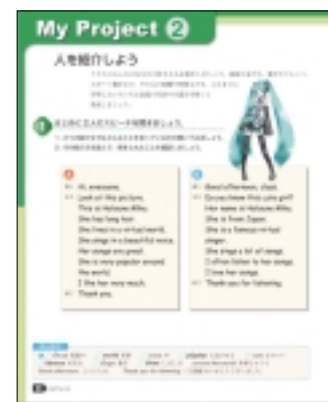
えてしまい、温めてもらおうとばばあちゃんの家にやって来ます。元気で活動的なばばあちゃんは、そんな動物たちの身体を奇想天外な解決方法で温めてくれます。おもしろくて読み進めたい物語なので、生徒の力だけで一気に読ませたい題材です。

この課は、内容理解だけにとどまらず、登場人物になりきって、ピクチャーチャートを使った紙芝居やスキット発表につなげたい内容です。英語のセリフはスピーチとは違い、感情豊かに英語を使う楽しさを体験させてくれます。パフォーマンスをビデオで撮影して、みんなで鑑賞するのも楽しくてよい振り返りになります。



My Project 2: 「人を紹介しよう」

学期末にスピーチなどのパフォーマンス活動を行うのがMy Projectです。1年生1学期末のMy Projectでは小学校での自己紹介より少しグレードアップした「自己紹介」をします。2学期末は「人を紹介しよう」というテーマで自分の好きな人の写真を提示して紹介するShow & Tellを行います。ここでは今まで学んできた自分・相手以外の人称を扱い、モデル文では中学生に大人気のボーカロイド初音ミクを紹介します。日本語の作文でさえ苦手とする生徒が多いので、まずは、英語でかんたんに作文できるマッピングを指導し、今後のあらゆる作文にも応用できるように生徒たちのスキルアップをします。



1年p.86

また、このMy Projectでは、その学期に学習したProgramの各セクションの右下にあるWriteで書きためた英文を使ったり、既習表現を思い出しやすいように参照すべきページを表示しています。さらに、英語表現を豊かにする例文を複数提示したり、文と文のつながりを自然にするためのページを設定したり、どんな生徒にも英語で表現しやすくする仕掛けをしています。十分な練習を通して発表を成功させ、達成感をもたせることにより英語学習への意欲と自信を高めたものです。

おわりに

SUNSHINEでは、生徒たちの英語力を高めるために、各Programで新しい表現を学び、そこで学んだ表現を使って練習・表現活動、教科書本文の内容理解、音読やWriting活動をします。そして、学期の終わりにはMy Projectのパフォーマンス活動で、既習事項を総動員して自分の考えをまとめた英文で表現し、正確な英文をきちんと覚えて自分のものにしていきます。SUNSHINEでは、それらの活動を興味深く展開し、生徒たちの意欲を高めるためにいろいろな題材を盛り込んでいます。ぜひ教師用指導書などを活用して教材研究を深め、背景にある情報や内容を掘り下げて、より興味深く、より楽しい授業を展開していただきたいと願っています。

●ボーカロイドと初音ミク●

ボーカロイドとは、人の声を基に作られた音声を合成する技術・製品のことで、製品にはそれぞれキャラクターが設定されており、自作のメロディーと歌詞をソフトに入力すると、実際に人間の声を録音しなくてもそのキャラクターが歌を歌ってくれるしくみです。「初音ミク」もそのキャラクターの1人で、グッドデザイン賞をはじめさまざまな賞を受賞しています。制作された楽曲は動画共有サイトにアップロードされ、ボーカロイドは1つのエンターテインメントとして多くの若者に支持されています。

インターネットは私たちの生活には切っても切れないものになっています。Eメールや英語ブログなどを授業に取り入れる際には、ボーカロイドも生徒さんの興味・関心をひくツールの1つとして参考にしていただければ幸いです。(編集部)



関西外国語大学教授
中嶋 洋一

2年生編

平成28年度版の2年生の内容は、コミュニケーション活動をさらに発展させられるよう配慮した。今回ご紹介するのは、心情を豊かにする教材、読み取った内容を自分で演じてみるという教材である。

Program 8 Reading: Friendship across Time and Borders

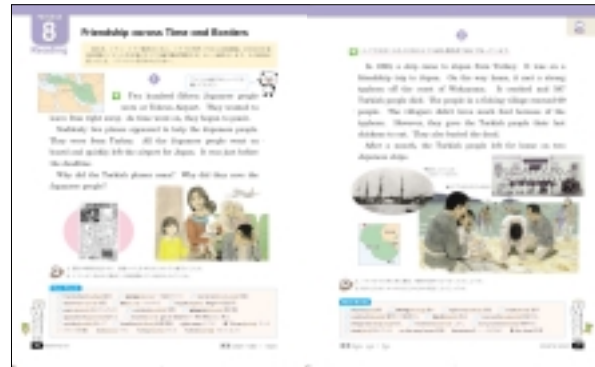
本課は読み物教材である。1890年(明治23年)、オスマン帝国最初の親善訪日使節団が軍艦エルトゥール号で日本を訪問する。しかし、帰途に台風に遭い、紀伊半島沖の岩礁に乗り上げ座礁して沈没してしまう。これにより、600名以上が海へ投げ出され、587名が死亡または行方不明となる大惨事となった。

通報を受けた大島村(現在の串本町)の住民たちは、総出で救助と生存者の介抱に当たった。このとき、村では台風のために出漁できず、食料の蓄えもわずかだったが、住民たちは非常用のニワトリさえも提供し、生存者を救護した。知らせを聞いた明治天皇は、政府に対し、可能なかぎりの援助を行うよう指示する。各新聞はこのニュースを伝え、多くの義援金・弔慰金が全国から寄せられた。生還した69名は、明治政府から2艘の船を提供されて帰国する。

それからおよそ100年たった1985年(昭和60年)。イラン・イラク戦争時、イラクのサダム・フセイン大統領は、イラン上空の航空機に対して無差別攻撃をすると宣言した。各国は期限までにイラン在住の自国民を軍用機や旅客機で救出した。しかし、当時の日本は自衛隊の海外派遣ができないという制約があり、救援に向かえなかった。日本の航空会社も「安全が保障されないかぎり、救援機は出せない」という苦渋の選択をした。

空港にいた日本人たちが諦めかけたそのとき、2機の飛行機が突然やってきた。トルコからだった。トルコの飛行機は、日本人215名全員を乗せて間一髪イランを離れた。空港で待っていた500人近くのトルコ人たちは車でイランを脱出した。政府はなぜトルコ機が日本人乗客を助け出したのかを知らなかった。それに

ついて、当時のトルコ大使はこう述べている。「トルコの人々はエルトゥール号の話を教科書で読んで知っています。そこで日本人が困っているのを見て、恩返しをするために、救援機を出したのです」



2年pp.76-77

今なお日本とトルコは、互いに助け合うような関係になっている。トルコが震災にあったとき、日本は阪神淡路大震災時に使った簡易テントを送り、消防署を復興する援助をした。逆に、東日本大震災のときには、トルコは諸外国の中で最後まで残って支援をしてくれた。

英語の授業では読んで内容を理解するだけでなく、「感謝する心」「日本人の矜持」についても考えさせたい。本題材では、作文やディスカッションを通して、真の「国際理解」について考えを深めるよい機会としたい。



2年p.78

Program 4: Eigo Rakugo

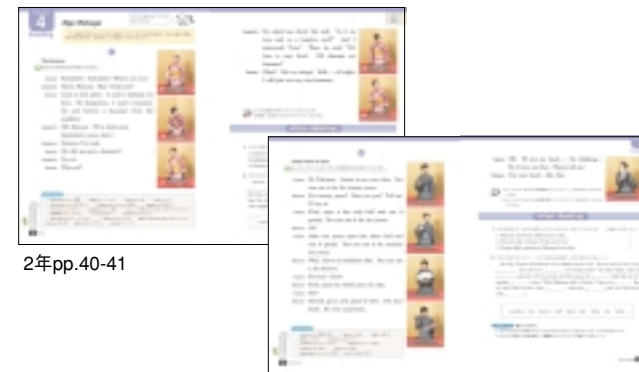
本課も読み物教材である。今までも教科書の教材として伝統芸能としての落語や落語家を取り上げたことはあったが、落語の壱そのものを読み物教材として扱った。今回、英語落語を取り上げたのは、読み取るだけでなく、落語を実際に演じることで場面を考えた「音読」ができるようになってほしいという願いからである。

落語では1人で2役を演じる。ダイアログを1人で

演じるときに工夫しなければならないのは、身振り手振りや「間」の取り方、声の調子や抑揚などで2人の違いをどう演出するかということである。さらに、落語では扇子と手拭いを使って、あらゆることを表現する。その2つの小道具をどこでどう使うかを考えさせることも、場面を想像させることにつながる。

この英語落語を演じたあとは、既習の単元や以後の単元での音読に生きてくるはずである。Teacher's Manualではほかの壱も紹介しておくので、読むだけでなく、自分で選んだ落語をグループで演じることも可能である。

なお、今回の教材化にあたっては、大阪の子ども英語落語協会の方々の全面的な協力を得て、映像で実際に子どもの英語落語を見られるようにした。落語を演じている映像は、イメージを膨らませるのに大いに役立つだろう。



2年pp.40-41

2年pp.42-43

Program 7: If You Wish to See a Change

今回の改訂では、1年から3年まで、1文が長いという指摘のあったものを、内容は変えずに一気通読ができるような語彙数に減らした。このような大きなメッセージを扱った単元では、実際にセヴァン・スズキさんの著した書籍を読む、彼女のスピーチを視聴するといった事前の教師側のアクションが大切である。そうすることで、授業のイメージを広げ、深めることができる。

私が1998年にカナダのVictoria大学で行われたGlobal Instituteに参加したときに、講師のDavid Selby氏から12歳のセヴァンさんのスピーチビデオを見せていただいた。父親であるDavid Suzuki博士の影響を受け、小さい頃から環境について強い問題意識をもっていたという彼女の鬼気迫る話しぶり内容に接したときの衝撃は凄まじく、聞いていた受講生たちは圧倒された。どうしても彼女のスピーチを日本の子どもたち

に見せたいと願った私は、帰国後、カナダのSky Fish Projectと連絡を取り、拙著『学習集団をエンパワーする30の技』(明治図書)やDVD『6-way Street』(バンブルビー)にそれを収録させていただいた。

平成18年度版のSUNSHINEではそのスピーチを取り上げた。スピーチそのものは、先のDVDやインターネットでも視聴できる。ぜひ、このスピーチを生徒に見せていただきたい。そして、エール大学を卒業後、自分でNPO法人を立ち上げ、地球環境の問題に警鐘を鳴らし続ける彼女の生き方に注目させたい。

授業で環境問題を取り上げ、英語でディベートを行い、出た意見をセヴァンさんに送った中学校がある。彼女からはサイン入りの著書と手紙が送られてきて、驚いた生徒たちの英語学習へのモチベーションが一気に上がったという。教科書を創造的に扱う教師の工夫が、生徒を成長させるのである。(☞ 本誌pp.18-19 Teacher's Forum「セヴァンさんに手紙を書こう」)



2年p.63

My Project 4, 5, 6のリニューアル

公開授業を見せていただくことがよくある。「これは力がついているな!」と感心し、先生方に聞いてみると、「My Projectをやっているからだと思います。学び合いができるので、生徒が生き生きと取り組みます。私自身、My Projectを楽しみにしています」と異口同音に話される。そう語る英語教師の表情もにこやかだ。彼らは、学期の最初にMy Projectのページを開かせ、到達目標を示している。見通しが生まれた生徒は、通常単元とのかかわりから「学ぶ意義」を知るようになる。一方、文法項目が特になくということもMy Projectをパスしている教師の授業では、案の定、生徒が育っていない。出力の場面を確保し、協働学習を仕組みないかぎり自律的な学習者にはなれない。教師主

導で質問に答える生徒ではなく、自ら質問ができる生徒を育てることが教師の責務である。

さて、1年のMy Project 3「知りたい情報を引き出そう」ではさまざまな質問の仕方を学ぶ。それを受けて、2年のMy Project 4は、「スキット作りを楽しもう」という対話のつなぎ方を学ぶ内容となっている。現行版は練習が中心であったので、改訂版では「出力」と「振り返り」の場面を用意した。生徒たちは、練習したつなぎ方を駆使して作った「オリジナル・スキット」を演じることが可能である。

My Project 5は、なかなかはっきりとした夢がもてないという中学生の実態を踏まえて、「こんな人になりたい」という内容にして、書きやすくした。1年生で習慣になったマッピングを使って英文スピーチの書き方の手順を丁寧に示した。

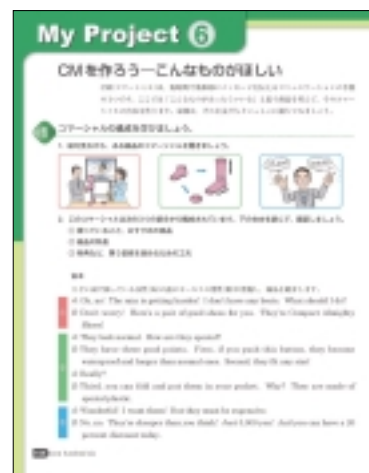


2年p.73

My Project 6は、「欲しいもの」「こんなものがあったらいい」といった架空の商品のCMづくりに取り組む。創造性を生かして、ものを詳しく描写する力を高める内容にした。海外のCMなどを視聴し、参考にして作れば、楽しく活動できるだろう。

一方、現行版のMy Project 6「賛成意見や反対意見を言おう」の内容は、POWER-UP 8 Writing & Speakingに移行した。中学校の現状では、ディベートの下地作り

がなかなか長期的に取り組めず、形だけで終わることが多い。相手の言っていることが聞きとれず、自分が覚えたことを言っているだけでは意見が噛み合わない。ディベートで育てたい力は「論理的に考える力」「両面から考える力」「筋道を立て



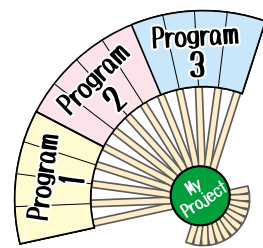
2年p.106

て言う力」などである。そのプロセスを明確にし、まずは書いてみる、次に書いたことを言うというように、手順をわかりやすく具体的にした。これにより、指導者がディベートを特に体験したことがなくても、上述の力を育てられるようにした。英語が苦手な生徒でも取り組めるように工夫したつもりである。学習指導要領に記されている中学校段階の目標を達成させ、高等学校のディベート活動の下地としたい。

ちなみに、現行版の3年生最後のMy Project 9は今回の改訂でSpecial Project「- 思いを伝えよう」とした。3年間の学びを「思い出」「決意」という形で自己表現する。

毎年、全国の先生方から「卒業英語文集」が届く。「3年間の集大成」を考えている方が多いことに感心させられる。「扇の要」とは、このようなまとめの活動を意味する。ただ、3学期に改めて作品を作る時間はとれない。かといって入試の指導だけで終わるのは味気ない。そこで、このSpecial Projectは3年の4月に生徒に見せておき、見通しをもたせておくことをおすすめしたい。書きためておいた自己表現の中から、自分で1つ選んでリニューアルすれば短時間でまとめとなる作品や文集などを完成させることができる。さらに、それを鑑賞し合う時間を作れば、高校の英語学習へとつながっていくだろう。

SUNSHINEは、3年間を通してinteractiveな活動を提供し、「コミュニケーションとは何か」という命題に挑戦し続ける教科書である。授業で「知りたい、伝えたい」という気持ちを育て、意見や情報が適切にやりとりできるよう、自然な場面やイメージしやすい文脈を大切にしている。ぜひ、POWER-UPシリーズやMy Projectに真摯に取り組む、協働学習へとつなげていただきたい。プリント中心の学習では、コミュニケーション能力も「心」も育たないのである。



広島大学教授
深澤 清治

3年生編

教師や生徒とともに育つ教科書

1. はじめに

新しい英語教科書を手にしたときの喜びは、だれにも覚えがあるでしょう。特に、最近の教科書はカラー化が進み、表紙から本文、活動のページまで目を引くものばかりです。平成24年度から初めて導入されたAB判という判型の中に、新しい題材を満たして始まったSUNSHINEは、現場の先生方と生徒のみなさんによる3年間のいわばフィールドテストを経て、平成28年度に、また新たな題材と活動をお届けすることになりました。学習指導要領で求められる英語教育の目標達成をめざし、題材選びを通して生徒の学びたいことと教師の教えたいことをどのように統合するか、1年以上の長い議論を経て、ようやく完成をみることができました。以下では、平成28年度版SUNSHINE 3の題材内容について、そのねらいや特長を紹介することで、私たち著者がその題材選定に込めた思いをお伝えしたいと思います。

2. 題材で伝えたいこと、学んでほしいこと

SUNSHINEでは、編修の基本方針として、学習指導要領に示された目標と内容に沿って、「生徒の興味・関心を高め、我が国及び外国に関する知識・理解を深め、豊かな心情を育成する題材を提示する」ことをねらっています。そこで、以下ではSUNSHINE 3の題材からいくつかを選んで、その大まかな内容とねらいを紹介し、その中から心に残り、豊かな感性を育む英語のキー・センテンスを1つずつ取り出してみたいと思います。

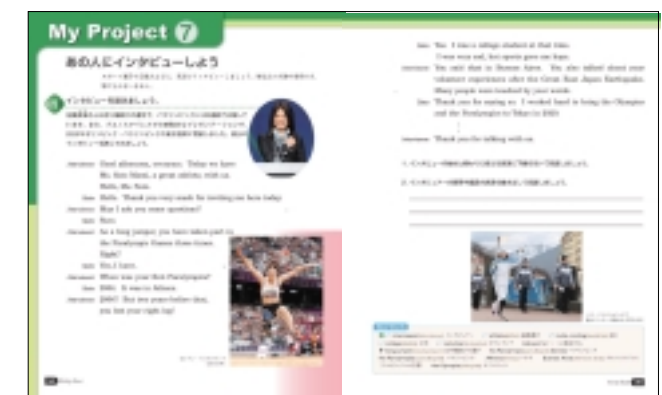
(1) 生徒の興味・関心を高める題材

My Project 7: あの人にインタビューしよう

佐藤真海さん(宮城県気仙沼市出身)は走り幅跳びの日本記録とアジア記録保持者で、パラリンピックに3回出場している陸上選手です。アルゼンチンのブエノスアイレスで開催されたIOC総会での2020年東京五輪・パラリンピックの招致成功に大きく貢献した感動的なスピーチを覚えている方も多いことでしょう。佐

藤さんは大学時代、応援部のチアリーダーとして活動していたときに、骨肉腫発症により右足膝以下を切断しなければならなくなりました。

失意のどん底にあったとき、彼女を救ったのはスポーツの力でした。IOC総会でのスピーチでも、“I was very sad, but sports gave me hope.”と、胸を張って語った彼女の笑顔が印象的でした。スポーツには、新たな夢と笑顔を育む力、希望をもたらす力、人々を結びつける力、そしてことば以上の大きな力があるという、佐藤さんの力強いメッセージを感じていただきたいと思います。また、My Project 7はこのインタビューを参考に、生徒がインタビューしたいと思ういろいろな有名人を決めて、台本を書いたり、実際にペアでインタビューをしたりする活動に発展させたいプロジェクトです。



3年pp.34-35

(2) 日本および外国についての知識・理解を深める題材

Program 7: What Is the Most Important Thing to You?

NPO法人「宇宙船地球号」代表の山本敏晴さんは、世界じゅうでボランティア活動を行っている日本人の1人として、アフリカの途上国への援助者を養成しています。その傍ら、外国の子どもたちに「いちばん大事なものを」描いてもらう「お絵かきプロジェクト」を続け、それぞれの国での子どもたちの実情を訴える地道な活動をしています。この活動の記録を読んで、日本の中学生にも世界の様子を知り、自分には世界のために何ができるか(act for the world)を考えさせることができるでしょう。

この課では、タイトルにもなっている“What is the most important thing to you?”という質問を生徒に投げかけることによって、教室でShow & Tellなどの

活動につなげることができます。同時に、本文中にある南太平洋のツバル、ルーマニア、カンボジアの子どもたちの答えと比べてみて、自分たちの答えとの共通点と相違点について発表する活動につなげていくこともできます。



3年p.69

Program 9: Education First: Malala's Story

2012年10月9日、学校からバスで帰宅中、女子教育に反対するグループの武装メンバーに襲われ、銃で頭を撃たれながらも九死に一生を得てなお、女性や子どもの権利を世界に訴える当時15歳のパキスタンの少女、マララ・ユスフザイさんの逸話です。彼女の16歳の誕生日である、2013年7月12日に国連で行ったスピーチは、世界じゅうの人々感動を呼び、その勇気と力強さにだれもが賞賛を送りました。国連はその日を「マララ・デー」と名づけ、マララさんにとっても特別な1日となりました。平成28年度版SUNSHINEから新たに取入れられた最新の題材で、著者全員が中学生にぜひ読ませたいと力を入れたプログラムです。

この題材を読むことを通じて、世界の子どもの教育の現状、教育の重要性、男女平等、自他の敬愛を学ぶとともに、テロに屈することなく、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことができるでしょう。「本とペンこそが最強の武器」という彼女のスピーチの最後の一文“One child, one teacher, one book, and one pen can change the world.”から、この短くやさしい表現に込められた力強いメッセージを、シャドーイングや朗読を通して、ぜひ生徒全員に味わってほしいと思います。また、My Projectの延長として、マララさんへの仮想インタビューなども生徒に考えさせてはいかがでしょうか。



3年pp.84-85

(3) 豊かな心情や平和を愛する心を育成する題材

Extensive Reading ②: Mother Teresa

世界じゅうの貧しい人々、弱い立場にある人々のためにその一生をささげ、1979年にノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサの生い立ちから神の愛の宣教師会での活動を経て、人々のために尽くした人生をまとめた読み物教材です。平和や人道主義などの大切さを訴えるこの題材は、英語教科書の定番題材とも呼ばれ、長い間、多くの教科書や副教材に採用されてきました。根強い人気のある題材で、今回は一部を書き改め、多読用教材の1つとして残すことにしました。



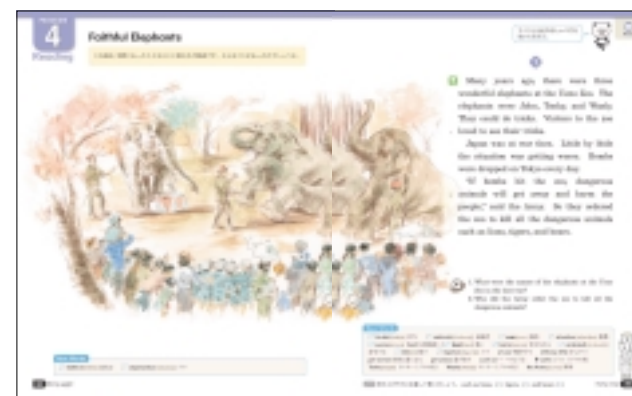
3年p.102

彼女の功績について知ると同時に、本文中の彼女のことばに込められた、彼女の生き方にも着目したいと思います。特にノーベル賞受賞時に「世界平和を促進するために私たちは何ができるでしょうか」と聞かれたとき、彼女の答えは、“Go home and love your family.”というものでした。「慈善は家庭から」ということばのように、身の回りの身近なものや家族を大切に作る気持ちが、世界の平和の根幹にあることを教えてくれます。

Program 4 Reading: Faithful Elephants

戦争を扱った平和教育題材はたくさんありますが、動物を題材に書かれたものはあまり多くはありません。この話は、終戦間近の昭和20年、空襲を受ける東京で、市民の安全のために動物たちを殺さざるを得なかった上野動物園の飼育係の苦悩を描いた、実話に基づいて書かれた物語です。戦後70年となる今日でも、毎年8月15日を迎えると、秋山ちえ子さんの朗読が、「二度と戦争はしてはいけない」というメッセージとともに、ラジオから流れてきます。戦争が生み出す身勝手な人間の考えや振り舞いへの反省と同時に、その人間がもつ優しさと愛情を伝えようとする、彼女のライフワークでもあります。絵本だけでなく、アニメ化やTVドラマ化もされており、このストーリーに感銘を受けたアメリカの歌手、シンディ・ローパーさんが、英語版*Faithful Elephants*の朗読を担当していることでも有名です。

自然災害や戦争によって失われた多くの命、その中にはもっと生きられた命、生きていたかった命がたくさんあるはずです。それは動物にとっても同じことです。動物園の飼育係が日に日に弱っていく象たちを見ながら涙ながらに言った“If they can live a little longer, the war may end and they will be saved.”という祈りにも似た願いのことばから、改めて戦争の悲惨さと平和の大切さに気づかせたいものです。なお、この題材は史実に沿ったドキュメンタリーと言うより、あくまで実際にあったことを下敷きに書かれた「物語」として扱っていただきたいと思います。



3年pp.38-39

3. おわりに

このようにSUNSHINEは、現代的な題材、心を打つ題材、日本と世界をつなぐ題材にあふれています。「教科書を教える」のか、「教科書で教える」のか、よく議論になるところです。いかに心を揺さぶる題材であっても、それはあくまでもテキストとして文字化された素材です。教科書は構成に従って一方的に伝えるコースブックではなく、学校や生徒の実情に合わせていかようにも発展させることのできる手掛かりとしてのソースブックです。内容に関する知識や情報を単に伝えるだけでなく、その題材にどのように命を吹き込むかは、その使い次第です。

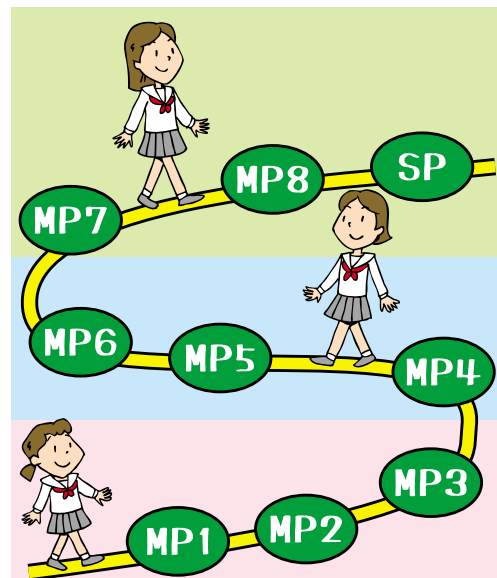
たとえば、読み物教材のプレリーディング活動にどのようなイントロを用意するか、そして読む過程でテキスト内容をどのように、どこまで深めることができるか、さらにポストリーディングの活動で、テキストをいかに生徒にとって身近に感じさせながら、生徒を育てることができるか、英語教師の腕に大きくかかっています。

教科書はいったん著者の手を離れたら、その生かし方に限界はありません。同時に、お使いいただく先生方や生徒のみなさんからの意見を取り入れながら、「教師や生徒とともに育つ教材」、SUNSHINEはそのような教科書でありたいと願っています。

How to Use Sunshine

① 教科書の構成

SUNSHINEは中学校での3年間でどのようなことができるようになってほしいかを最初に決め、年間3回のMy Projectを設定しています。そこから、各My Projectができるようになるには何が必要なのかを考え、Programが作られています。その補強として、英語のしくみやPOWER-UPが設けられています。各学期のはじめに、My Projectでどのような活動(パフォーマンス)をするのか、予告すると生徒たちの学習の目標が定まり、モチベーションもアップします。



② 入門期

SUNSHINE 1では本課が始まる前に、小学校の外国語活動からスムーズに中学校の英語学習に入れるようにLet's Startが設けられています。小学校の外国語活動の復習として、生徒の理解度を確かめながら、授業を進めることができます。

小学校の外国語活動と中学校英語との大きな違いは文字を書くことです。Program 1ではアルファベットを聞くことから始まり、文字の特徴や音と文字の関係も学びながら、楽しく無理なく大文字と小文字の書き方までを学ぶことができます。



▲1年pp.6-7



▲1年pp.16-17

③ Basic Dialog

Basic Dialog

- 1 Who's that man?
- 2 Which man do you mean?
- 3 I mean *the man reading a newspaper*.
- 4 Oh, he's my friend's father.



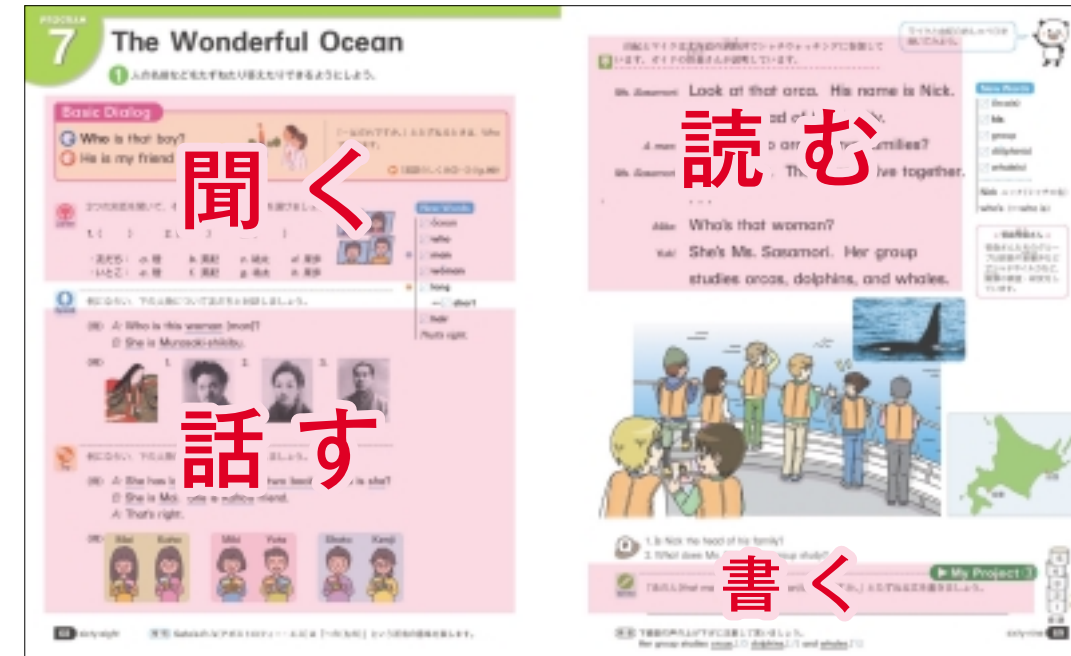
「～している」と、人やものについて説明を加えて言うときは、〈現在分詞(～ing)〉で始まる語句をあとに続けます。

「英語のしくみ①-④」(p.60)

▲3年p.54

Basic Dialogはそのセクションで新しく学ぶ言語材料を典型的な場面と使用例で示したダイアログです。授業の導入ではもちろんのこと、My Projectやテスト前の復習などにも使用することもできます。基礎・基本を大事にすることで学力の底上げにつながります。

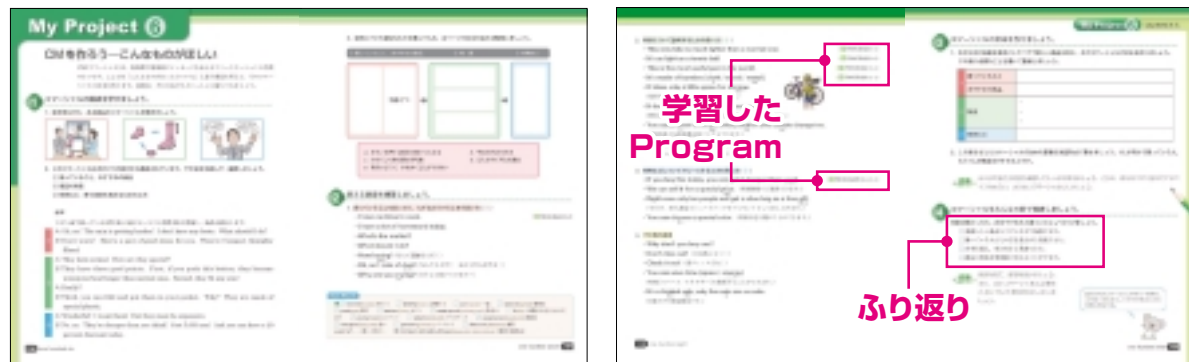
④ Program



▲1年pp.68-69

各Programは1セクション2時間で進めるように想定しています。基本的には、左ページで1時間、次に右ページで1時間と考えて構成されています。この見開きで4技能の総合的な英語学習をし、⑤My Projectの統合的な活動につなげていく構成になっています。

⑤ My Project



▲2年pp.106-109

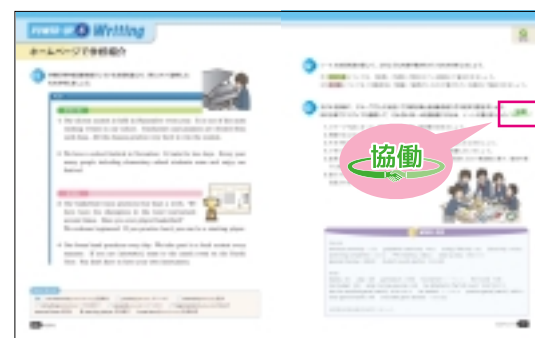
平成28年度版SUNSHINEではMy Projectの授業配当時数を従来より1時間増やし、週4時間としました。それでも内容は詰め込みすぎず、ていねいに段階を踏んで取り組めるように工夫されています。また、原稿を書く際に必要な表現がすぐに出てくるように、教科書のどこでその表現を習ったのかを示しています。大事な表現は使うことで徐々に身につけていきます。その手助けとして、必要なときすぐに該当セクションへ立ち戻れるようにしています。

また、どのようなところに気をつけてMy Projectに取り組めばよいのかを明示してあるので、生徒が安心して活動ができるようになっています。最後には必ずふり返り(自己評価)の時間が設けられています。

Programで学んだことをフル活用して取り組みます。



⑥ 協働学習



▲3年pp.80-81

平成28年度版SUNSHINEでは、新たに「協働学習」の要素が加わりました。「コミュニケーション能力の基礎」はただ英語を書き、話すだけではありません。相手の側に立ち、相手ができるように伝えることや相手を知ろうとすることも大切です。そのような能力や気持ちを育てる助けとなるのがこの「協働学習」です。協働学習を通して、学び合い、高め合いながら楽しく英語が学べる工夫をしています。

My Projectにも協働学習が盛り込まれています。

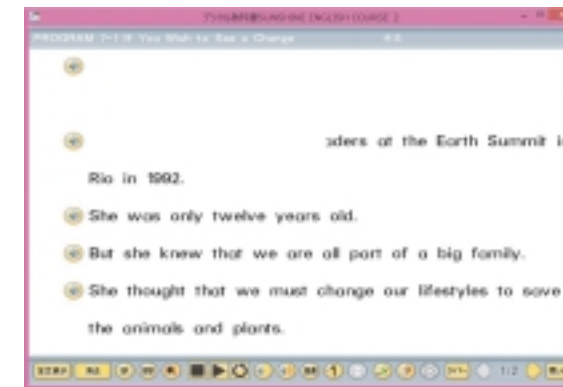
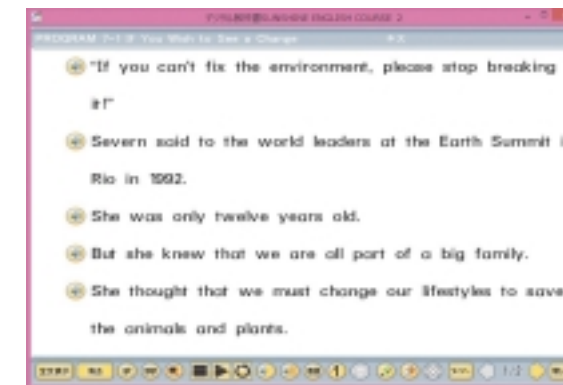


⑦ CAN-DO リスト



CAN-DOリストは3学年とも同じ内容のリストを掲載しています。その理由は3年間を通して、生徒自身がどの程度英語の力(できること)が身についているのか軌跡をたどり、確かめられるようにするためです。評価の基準としてではなく、「できるようになること」の指標の1つとして示してあります。

⑧ 補助教材



平成28年度版もフラッシュカードやピクチャーチャート、学校用CDなどのほか、デジタル教科書をご用意いたします。デジタル教科書には平成24年度版でご好評の音声の「カラオケ機能」やRead and Look upに効果的な「文字消去機能」などを備えており、授業で有効に活用していただけるものと確信しています。



可能性を広げる発信型言語活動！

広島県広島市立井口中学校教諭 胡子 美由紀



1. はじめに

国が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を打ち出し、小学校における英語教育の拡充、中学校・高等学校における英語教育の高度化と英語力向上をめざしている。また、中学校外国語科の新学習指導要領でも、4技能の総合的な指導を通して、統合的に活用できるコミュニケーション能力の育成が求められている。

平成24年度版に引き続き28年度版SUNSHINEには、中学校3年間の到達目標を明確にし、バックワードデザインに基づいた総合的な言語活動が各学年にバランスよく配置されている。特に統合的な言語運用をめざしたMy Project(以下MP)は9つの言語活動で構成されており、生徒の「やってみよう」「頑張ろう」という思いを高め、真のコミュニケーション能力を育む内容となっている。

MPの特長は次の5点だ。①生徒主体の発信型言語活動である。②自分で考え英語を実際に使う場(発表)がある。③4技能を活用し自己表現できる力をつける。④言語活動が既習内容・表現とリンクしている。⑤仲間との協働学習の中で学びを深める。ここでは、2年生MP6「CMを作ろう—こんなものがほしい」を取り上げ、指導の流れと活用例、Tipsを具体的に示す。

2. MP6 指導の流れ

(1) ゴールの提示とMP6全体像の把握

MP6の内容とつきたい力を明確にする。ことばだけでなく、先輩のビデオや実際のCM映像を見せイメージをもたせる。教師が見る視点も予め示す。ゴールイメージがあると見通しが生まれる。見通しがあるとモチベーションが高まり、生徒は自主的に動くようになる。

(2) 取り組みの流れを提示

いつまでに何をしておく必要があるかを確認させる。原稿作成・練習などを段取りよく行うために、発表日(撮影日)を指定し必要な取り組みは生徒が考える。MPは4時間扱いだが、4時間連続で取り組んで最後に発表するのではなく、発表前に時間をとるようにする。生徒のパフォーマンスを熟成させるためにじっく

り推敲し練習する時間を確保したいからだ。試行錯誤をくり返しながら練習を重ねると生徒たちのこだわりが生まれる。

(3) CMのTipsを確認

CMは人の心をつかむ。伝えたい相手が想定され、短時間で劣等感を刺激し自己関連性があるメッセージを発信するからにはほかならない。「困り感」に迫り、最初にあり得ない状況を作り出すことでCMの中で対比構造が生まれる。MP6①を利用し、キャッチコピーやインパクトのあるパフォーマンスなど短時間で効果的にメッセージを伝えるTipsを考えるとよい。また、英語は世界を知り、人と人をつなぐ言語であるという視点ももち、英語でのCM作成に取り組みさせる。

(4) マッピング・原稿作成

MPの言語活動では多様性が大切だ。場面設定を行い、台本の流れをペアでマッピング。アイデアを出し合いながら英語で原稿を書く。最終場面(オチ)から考えると筋が通った話ができる。MP6②「使える表現を練習しましょう」や辞書を活用し、内容を英語にしていく。私は日本語の台本は作成させない。話すことも書くことも、考えを即興で英語にする本来のコミュニケーションのあり方を追求したいからだ。原稿完成後はほかのペアとの交流や推敲する過程を入れる。

(5) 練習・交流

①内容を覚えること ②発音 ③パフォーマンスの3点に重点を置く。特に①は前後の台詞と全体の流れを覚えさせておく。流れをつかんでいないとパフォーマンスが台無しになる。うっかり忘れても相手が覚えていれば助けることもできる。②は聞き手に伝わる声量であることはもちろん、英語らしい発音とアクセントを意識させる。発音は一朝一夕に身につかないので帯活動や音読時間も活用し、しつこく粘り強く指導を行いたい。また、発表を見せ合い改善する交流の時間をつくる。ほかのペアとの交流で気づいたことは改善点として生かすことができる。さらに生徒のやる気に火がつく。同時にこの交流はリハーサル機能も果たす。

(6) リハーサル

練習時にケアすべき3点と立ち位置などの確認を行

う。交流→リハーサルは生徒たちには緊張感をもって演じ、何度も英語を発話する機会となる。改善点が出ると原稿に戻るの、再考→書く→読む(話す)、読む→再考→書く→話すと技能をフル稼働させることになる。MP6までに5つのMPがある。特に1年生MP1「自分のことを話そう」では絶対に失敗させないように念入りに行う。成功体験が後のモチベーションアップにつながるからだ。

(7) 発表

全体で発表会か個別撮影を行う。生徒たちは仲間から賞賛を得られる発表をしたいので、休憩時間ももちろん発表の直前まで最終確認に余念がない状態となる。改善点は発表前に押さえ、発表はのびのびとさせるとよい。よい点をほめ、自信をつける機会としたい。

(8) 評価

発表前にMP6④の確認と教師が評価する視点を再度示す。自己評価と共に、ほかのペアと相互評価も行い、今後の自分、ペアと学級の課題を明らかにする。うまくいったペアはさらによいものを、できなかったペアは次こそは！と闘志を燃やす評価としたい。

(9) 発表後

撮影後はメタ認知力を高めるため、必ず映像を見せたり感想を書かせたりする。映像で残すと他学級や次の学年へのモデルとして示すことができる。原稿を印刷し、全員に配付するのもお勧めだ。生徒にとっては仲間の書いた原稿は読む気をそそるものだ。自分が使わなかった表現やわからなかった表現にもふれられ、よいインプットの場となる。

3. 協働学習

MPは3年生までの9つの言語活動がSpeech型と、Dialog型に分けられる。どれもペア・グループで生徒どうしのかかわりから気づき学びを深める構成だ。特にMP6はDialog型で、仲間と1つの作品を作る楽しさ、英語で伝える醍醐味、達成感を味わえる内容だ。教師の介入なしで生徒の活動がうまくいくように、日々の活動で内容・学習形態を工夫し、生徒どうしがつながるよう仕掛けることが大事だ。

4. 帯活動

既習事項の定着を図り、チャレンジングな活動に挑戦させるために帯活動が有効だ。各課の下地づくりのうえに、つきたい力を育むのに必要な活動をスモールステップで行う。毎時間行うことで生徒の負荷を軽減できる。私はチャットやモノログなど、英語での発

信力を高めかつ人間関係をよくする言語活動を取り入れている。特にMPは発表を伴うため、小さな発表活動を帯で行い、自信をつけさせたい。ほどよい緊張感の中での発表を積み重ねることで発表のスキルや聞き手に必要なechoやrepeating, fillerなどを身につけることができる。発表者に“Wow!”などの「Reaction」や“Good job!”などの「Compliment」を返すことで生徒の意識が常に発表者に向けられる。この声により安心して声を出すことができる。特に励ましのことばは生徒どうしをつなぐ。自己解放できる温かい環境の中で、よい発表の仕方と聞き方を身体に染み込ませる。よい聞き手を育てるとよい話し手が育つ。

5. マネジメント

豊かな人間関係を築き、安心感の中で言語活動を行う土台としてルールを徹底させたい。「Keep smiling」「English only」「Eye-contact」などのコミュニケーション能力を高めるもの。「机はぴったりつける」「授業道具は揃えて机に出す」「友だちとの机の間に物を置かない」などの授業規律にかかわるものだ。小さなことだが徹底すると、どんな活動もコミュニケーション能力を磨き、生徒どうしの深い絆を育む活動となる。ルールを徹底するとだれもが声をあげやすくなり、支え合いが広がる。温かく安心感のあるコミュニティの中で自己表現でき英語を使う喜びを知る。これがさらなる学びとして自信になり英語力の伸長にも寄与する。

6. 自己評価・相互評価

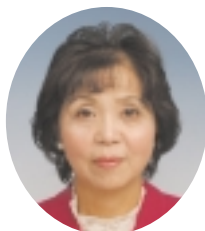
生徒はアウトプットして初めて自分の状態を理解できる。MPのように自己関連性の強い言語活動を行うと、仲間に対して自分のことを表現することにより客観的に自分のことを振り返ることができる。また、相互評価により他者の視点から学ぶことができ、それが自己の内面の気づきを促し、メタ認知力を高めるのだ。

7. 終わりに

SUNSHINEは各ProgramとPOWER-UPシリーズの学習内容の積み上げがMPの発展的・統合的な言語活動にリンクする構成になっており、学んだことが点にするのではなく1つの線になり、つながっている。教師がめざす生徒像をもち、必要な手立てを講じれば必ず力がつく。特にMPの言語活動は、生徒が英語ということばに興味をもち、仲間と学ぶ中で他者とのかかわり合う力を鍛え、ひとりの人間として豊かに成長していく大きな力になるはずだ。



下妻市小中合同英語フォーラム



茨城県下妻市立高道祖小学校校長 島田 ゆき江

1. はじめに

学習指導要領においては、小学校外国語活動のねらいとして、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」とある。

また、中学校外国語(英語)においては、「外国語を通じて言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」と示されている。

5年後の2020年から、小学校においても英語が教科となり、5・6年生は週3時間程度、英語の学習が始まる予定である。このような大きな転換期を目前にして、下妻市英語教育研究部では、児童生徒の表現力の育成のために、これまで5年間に渡って実施してきた市内小・中合同英語フォーラムを見直し、時代のニーズに即した新たな内容で取り組むことにした。

そこで、市内の外国語活動主任および英語主任とで協議し、小学6年生と中学1・2年生を対象に、茨城県教育委員会・県教育研究会主催による「英語インタラクティブフォーラム」の発表形式を基にして表現力の育成を図りたいと考えた。

さらに、小・中合同の発表会を通して、児童・生徒および教職員間の連携を深め、小・小連携、小・中連携による外国語活動および英語教育への協働体制を推進したいと考えている。

2. 英語インタラクティブフォーラムとは？

茨城県では、コミュニケーション能力の向上のために、1999年から毎年、中学2・3年生および高校生による英語インタラクティブフォーラムを実施している。

中学校の部は、A・Bブロックに分かれて、同学年の3～4人グループで、トピックに基づいて5分間英語で話し合う。Aブロックの県大会では、市郡大会、地区大会を経て、県内36人の生徒が3回の予選を行い、上位6人が決勝に進出する。Bブロック(英語を使用する国等に在住経験があるなど、いくつかの条件を満たす生徒が対象)は県大会のみ実施し、学年混合の3～4人

グループで話し合い、上位6名が決勝に進出する。

Aブロックのトピック例			
学年	第1ラウンド	第2ラウンド	第3ラウンド
中2	・ My school	・ Dream ・ Season	・ Friend ・ My favorite things
中3	・ My town	・ My favorite time ・ My favorite person	・ Summer or winter ・ Living in the big city or in a countryside

Bブロックの内容
まとまりのある英文を読み、その内容に関して5分間自由に話し合う。

高校生の部は、A・Bブロックに分かれ、プレゼンテーションと、そのあとの審査員とのQA(質疑応答)が評価対象になる。

3. 下妻市小・中合同英語フォーラムについて

(1) これまでの英語フォーラムの内容

本市では、2008年度から、市内の小学校9校と中学校3校が小・中連携の一環として、英語フォーラムを実施している。小学校の部では、各校の6年生の代表者が参加し、ドラマやチャンツ、歌など、授業で学習した内容を生かして発表した。中学校の部では、1年生はスキットコンテスト、2年生はShow & Tellコンテストを実施し、上位3名を表彰した。

(2) 今年度の内容

今年度は、上記の英語インタラクティブフォーラムの中学校の部Aブロックの形式を採用し、小・中学生ともにコミュニケーションの楽しさを実感できるフォーラムに内容を一新した。

小学6年生は、9校の代表児童が4人グループになり、5・6年生で学習した言語材料を用いてショートスピーチ(自己紹介)とQA活動を行うことで、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成をめざした。その際、絵や写真、実物などを準備し、わかりやすく伝える工夫をさせることで、県主催の英語インタラクティブフォーラムへの円滑な接続を図った。

中学1・2年生の部は、3校の代表生徒がトピックに基づいて3人グループで話し合い、コミュニケーション能力を競い、上位3名を表彰した。

	小学6年の部	中学1・2年の部
参加人数	各校4～10名 計48名	各学年15名 計30名
グループ編制	4名/グループ 全12グループ	3名/グループ 全5グループ
発表時間	1ラウンド 5分	1ラウンド 5分
トピック	<Aパターン> 好きなスポーツ <Bパターン> 行ってみたい国 <Cパターン> 好きな芸能人 <Dパターン> 将来の夢	<1年生> My school My friend <2年生> My favorite place My favorite person
方法	・12グループを、発表グループと参観グループの6グループずつに分ける。 ・それぞれ交代で3回ずつグループのメンバーを変えて、トピックに基づいてショートスピーチとQA活動を行う。 ・各グループに1名ALTが参加し、進行役となる。	・1グループの1名がトピックを決めるくじを引く。15秒程度の自己紹介ののち、トピックに基づいて5分間話し合う。 ・4人の審査員(日本人2名・ALT2名)が評価する。(15点×4=60点満点) <評価の観点> ・Contribution/Attitude 5点 ・Content 5点 ・Language use 5点
発表	全大会で小学校1校がショートスピーチを披露する。	1・2年生の上位3名がフォーラムを披露する。
表彰	なし	第1位：(中1・2年：各1名)市長賞 第2位：(中1・2年：各1名)教育長賞 第3位：(中1・2年：各1名)研究会長賞

4. フォーラムへむけて

(1) 小学6年生の場合

まず、5・6年生で学習した内容を基に、AからDの4つのショートスピーチのパターンとQAを作成した。QA活動がスムーズに進むように、各校の児童のスピーチのトピックを前もって共有し、トピックに合った質問ができるように準備した。

発表の場面では、1人の児童が5文程度で自己紹介(Show & Tell)を行い、その内容について、ほかの3人が質問をし、QA活動を行った。

Aパターン(好きなスポーツ)	Hello! My name is Taro. My school is Sodo. I like soccer. I can play soccer. I play soccer on Mondays.
----------------	--

QA例：
Do you like Honda?
→Yes, I do. I like Nagatomo, too.
What is your soccer team?
→My team is ...

Bパターン(行ってみたい国)	Hello! My name is Hanako. My school is Shimotsu. I want to go to America. I want to see 自由の女神. I like hamburgers.
----------------	---

QA例：
What do you want to eat in America?
→I want to eat a big hamburger.
Do you want to go to Italy?
→Yes, I do. I want to go to Italy, too.

Cパターン(好きな芸能人)	Hello! My name is Jiro. My school is Takasai. My favorite singer is AKB48. I like Mayuyu. She is cute.
---------------	--

QA例：
Can you sing “恋するフォーチュンクッキー”？
→Yes, I can. I can sing “恋するフォーチュンクッキー”.
Do you like Takahashi Minami?
→Yes, I do.

Dパターン(将来の夢)	Hello! My name is Sakura. My school is Daiho. I want to be a vet. I like animals. I have a white cat.
-------------	---

QA例：
Do you want a dog?
→Yes, I do. I want a dog and a hamster.
What animal do you like?
→I like cats very much.

(2) 質問シート

6年生2学期までに習う質問リストを作成する。

5年	・What's your name? ・How are you? ・How many (pencils / dogs / apples) do you have? ・Do you like (soccer / cats / lemons)? ・What color [shape / food / animal] do you like? ・What do you want? ・What's this? ・What do you study? / What do you study on Mondays? ・What would you like?
6年	・Do you have ~? ・When is your birthday? ・Can you play baseball [play the piano / play kendama / ride a unicycle]? ・Can you cook [swim]? ・Where is the park [school / hospital / post office]? ・Where do you want to go? ・What time do you get up [go to school / go to bed]? ・What do you want to be? (2月に学習)

(3) スピーチ作りに役立つ単語リスト

既習単語ではないが、スピーチの中でよく使われる英単語をリストアップしておく。

favorite	お気に入りの	father	父
family	家族	friend	友だち
mother	母	he	彼は
		she	彼女は

(4) 相づちリスト

友だちのスピーチを聞きながら、相づちを打てるようにする。

Uh huh.	うん、うん。
I see.	わかりました。
I think so.	そう思います。
I don't think so.	そう思いません。
Me, too.	私も。
Really?	本当に？
Wow!	わーっ。
Pardon?	何？ [もう1回]
How about you?	あなたは？

5. フォーラムの成果

小学6年生の部では、積極的にスピーチをするともに、質問に対しても笑顔で答えるなど、体験を通してコミュニケーション活動を楽しむことができた。

中学校1・2年生の部では、3校の生徒が双方向的に会話を進め、具体例(根拠や理由、経験など)を挙げながら、自分の意見や考えを伝えることができた。

市内小・中学校12校が一堂に会し、フォーラムを行うことで、児童生徒および教員の小・小連携と小・中連携を推進することができた。



セヴァンさんに手紙を書こう



京都府亀岡市立亀岡中学校教諭 芦田 真一郎

1. 「これができたらおもしろい」をもつ

「セヴァン・カリス=スズキ(以下セヴァンさん)さんへ手紙を書いて送ったらどうだろう」「もし生徒が書いた手紙に彼女から返事が来たなら…」と考えたことがこの実践のきっかけでした。

かねてから「地球市民を育てる教師のための研修会」(関西外大・中嶋洋一先生 主宰)に参加する中で、生徒がわくわくする教材作りをしたいと考え、様々なタスク活動に挑戦してきました。

今回は、SUNSHINE 2 Program 7で取り組んだ「セヴァン・スズキさんに手紙を書く」という実践を紹介したいと思います。なぜなら、その活動を通して、子どもたちの変容を知り、多くの感動を得ることができたからです。

2. 最終ゴールから逆算で計画を立てる

まず、単元で学ぶ文法や語い、さらには既習事項とのつながりなどを整理しました。最終ゴールを「セヴァンさんへ英語の手紙を書いて送る」に定め、そこから逆算をして、次のような計画を立てました。

④ ゴール	セヴァンさんのスピーチの内容や環境について自分の考えを英語で書き、セヴァンさんに送る。
③	身近な環境問題について意見を持ち、かんたんなディベートを行う。
②	セヴァンさんのスピーチ映像を見る。その感想を交流する。
①	教科書を読んでセヴァンさんの考えを知る。

セヴァンさんへ英語で手紙を書くためには、環境問題に対して自分の考えや意見を持たなくてはなりません。そのためには、身近な環境問題について意見を自由に出し合う活動が必要であると考えました。そこで、まず日本語で簡易ディベートをしたあと、環境問題についての意見を持たせるきっかけとしてセヴァンさんの地球環境サミットでのスピーチ映像を見せました。

セヴァンさんを語るうえで欠かせないのが、1992年リオデジャネイロで開かれたこの地球環境サミットでのスピーチです。「本物の教材」は、教師の説明を越える力を持っています。彼女のスピーチの英語原稿に日本語訳をつけたプリントを配付し、スピーチ(DVD『6 way-street』より)を見せました。12歳の少女の世界への訴えは、同世代の生徒たちにとって大きな衝撃だったようで、視聴後に感想(日本語)を書かせたところ、ふだんはほとんど書かない生徒もびっしりと意見を書いていました。

3. 環境問題への意識を高める

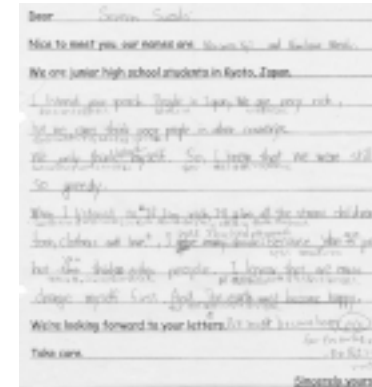
環境問題への意識を高めるために、まず日本語で「中学生にとって夏休みと冬休みはどちらが得か」「学校は退屈である」について簡易ディベートを行いました。学習ペアで「夏休み派 vs. 冬休み派」「学校は退屈派 vs. 学校はおもしろい派」のサイドを決めました。日本語で自由に意見を言い合ったあと、出た意見を辞書を用いながら英語に直していきました。意見は集約し、次にプリントで一覧にして配りました。生徒たちは、自分とは違う意見を知り、意見を戦わせる意欲が高まるのを実感しました。

最後に、環境問題に関する簡易ディベートを英語で行いました。論題は、「車を使うことは必要だ」「割箸を使うことは便利だ」「マイボトルを使うことは便利だ」「コンビニを使うことは便利だ」の4つです。今回は、ペア対ペアで勝負しました。それぞれ賛成意見、反対意見を3つずつ考えて発表をし、それを見ていた生徒たちがジャッジしました。生徒たちの感想は「環境のことについて気をつけようと思った」「対決形式でおもしろかった。またやってみたい。ほかの人の発表はおもしろい理由を考えているところもあってすごいと思った」といったものでした。地球環境への意識向上だけでなく、教室の仲間の意見に刺激を受けることがよくわかりました。

4. 英語の手紙をカナダへ

セヴァンさんに手紙を書くときに大切にすることは、「14歳の日本人として素直な思いをことばにする」ということです。生徒にはセヴァンさんに伝えたいこと、聞きたいこと、環境に対する自分の考えなどを自由に書こうと指導しました。

この際も、学習ペアを活用し、2人で手紙に書きたいことを出し合いました。そのあとで和英辞典を使って英文にしていきました。以下は生徒が書いた手紙(下書き)の一部です。



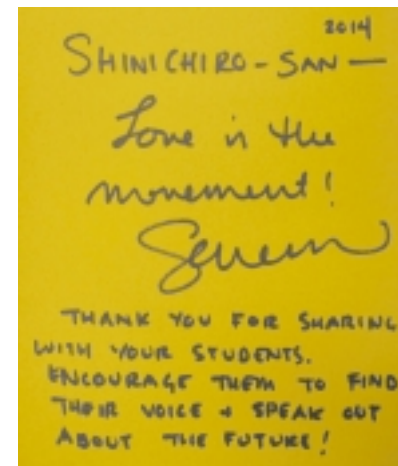
セヴァンさんへの連絡方法は窓口になっているNGO団体につながりました。そのNGO団体が手紙を集約し、カナダのセヴァンさんに送っていることがわかりました。

その後、2014年2月にセヴァンさんが来日されるというニュースを知り、講演会に行きました。直接、彼女のメッセージを聞き、感動するとともに彼女が今も環境問題に対して問題提起をされている姿にエネルギーをいただきました。後日、彼女から次のようなメッセージが届きました。

“Shinichiro-san - Love is the movement! Thank you for sharing with your students. Encourage them to find their voice & speak out about the future!”

セヴァンさんのメッセージを紹介したときの生徒たちの目の輝きは今も忘れられません。

「すごい!」「やった、伝わった!」という声が教室中に響きました。「教科書に載っている人から返事が来るなんて…」こうして、一通の手紙が生徒たちの英語に対する学習意欲を高めることになりました。



5. わくわくを大切に

教科書を創造的に扱おうと、教師も生徒も自分らしさが生まれ、意見の多様性や違いに気づき、わくわくするのだと思います。教科書を先に進めるので精一杯という授業ではこのような実践はできません。

単元のゴールを定め、そのゴールに到達できるように逆算しながら計画を立てていくこと。つまり、ゴールを見据えた授業・単元デザインこそが、授業を活性化させる鍵ではないでしょうか。

今回、私は2つのことを学びました。

1つ目は、生徒が出力する機会を与えることがより一層の学びを生むということです。簡易ディベートや手紙を書くという出力の機会を与えてこそ、真剣に取り組めるのだと学びました。

2つ目は、生徒の「やってみよう!」という意欲を高めることができれば、生徒は「出力」に伴う時間や労力も厭わなくなるということです。

2つをまとめると、「なぜ学ぶのか」という納得と「ゴール」への見通しは、学習を「アクティブ・ラーニング」へと高めるのではないかと思います。

6. 終わりではなく始まりに

このような「出力」を通して、既習内容や他教科での学びとつながったときに、生徒は大きな関心を寄せるようです。ですから、3年間を通して、計画的に取り組んでいくことが大切です。教科書の内容理解や文法の指導だけで終わらせているだけでは、「伝えたい」という気持ちは生まれてきません。大切なことは、教科書の内容をいかに「知りたい」という状況につなげ、「聞きたい・伝えたい」という状況を作り出せるにかかっていると思います。

教科書には、そのヒントがたくさん詰まっています。「わくわく」を生む単元構想を実践することが、「できた!」「やった!」という生徒の自信につながると考えています。

今後もそのような広がりが見られるような授業を、生徒とともに創り上げていきたいと思っています。

参考文献

中嶋洋一(1997)『英語ディベートの授業30の技』明治図書出版

中学生はSUNSHINEの題材をどのように感じているのか

北海道寿都町立寿都中学校教諭 中村 洋



学習指導要領の改訂に伴い新しくなった現行のSUNSHINEは、全体の構成も変わり、サイズも一回り大きくなるなど、これまでの改訂以上に大きく様変わりしたと言えよう。また、扱われる題材に関しては「地域市民を育成するため、環境問題・異文化相互理解を扱う題材」や、「感動の中に人の生き方を考えさせる題材」などがこれまでと比較してもより多く取り上げられている。

筆者は、平成24年度、平成25年度の2回、中学校3年間の最後の英語の授業時に、3年間学習した教科書本文の中で、最も印象的だった題材およびその理由を自由記述で答えてもらった(表1, 2)。なお、平成24年度は3年次のみ新課程の教科書を使用し、平成25年度は2, 3年次で新課程の教科書で学習した生徒たちである。

【3年間で最も印象的だった教科書の題材は？】

1位	H24年度版 中学校3年生 Prog. 4 Faithful Elephants	13名
2位	H18年度版 中学校1年生 Prog. 9 Yuki Talks about Kanzi.	3名
3位	H18年度版 中学校1年生 Prog. 1 パーティーで英語を話す	2名

〈表1〉平成24年度卒業生(n=26)

1位	H24年度版 中学校3年生 Prog. 4 Faithful Elephants	15名
2位	H24年度版 中学校2年生 Prog. 4 The Pillow	2名
3位	H18年度版 中学校1年生 Prog. 1 パーティーで英語を話す	2名

〈表2〉平成25年度卒業生(n=28)

結果、1位はほかを圧倒してFaithful Elephantsであった。児童文学作家、土家由岐雄氏による原作の『かわいそうなぞう』は、昭和49年度から昭和61年度までの長きにわたり、小学校の国語教科書にも掲載されていた物語である。だが、授業で扱う際に生徒に質問し

たところ、原作のタイトルを知っていた生徒は数名にすぎず、原作自体を読んだことのある生徒は皆無であった。何の予備知識もない真っ新な状態で、しかも日本語ではなく英語で読んだにもかかわらず、「物語の内容が深く感動的だったから」「飼育係の人が助けたくても助けられなかったのが悲しかった」など、生徒たちの心に深く刻み込まれたようである。

表にはない、各1名が答えた少数意見として、新課程への移行に伴い中学校2年生、3年生の教科書で2回取り上げられていたMother Teresaや、海外でボランティアとして活躍する山本敏晴さんの活動を扱ったWhat Is the Most Important Thing to You?, 貧しい子どもたちを助けるためにプロレスラーとしても活躍した神父を取り上げたA Priest in a Maskなどが挙げられていた。理由としても、「マスクマンが子どもたちのために一生懸命に頑張ってくれたから」「マザーテレサの活動がすばらしいものとわかったから」などが挙げられており、生徒たちが選んだ本文の多くが、編集方針としても掲げられた「感動の中に人の生き方を考えさせる題材」であると言えよう。

平成24年度、平成25年度ともに2名が答えた中学校1年生のProgram 1は意外であった。両年度とも、2名の内の1名はダイアログの英文まで完全に覚えていた。なるほど、中学校に入学して初めて本格的に学んだ英文である。日常的なあいさつと自己紹介という基本的な英文ではあるが、期待に胸を膨らませて中学校に入学し、小学校外国語活動では扱われない「読む活動」として最初に学習した内容が、しっかりと脳裏に焼きついているのである。

長い時間をかけ、多くの編著者の手により趣向を凝らして編集された教科書である。これを用いて生徒の英語力や意欲を高めるのは、ほかでもない、我々英語教員の役目である。

ループリックだからできること・できないこと

神奈川県横浜市立あざみ野中学校教諭 遠藤 肇子



受動的すぎると指摘されていた日本の教育は変貌をとげた。各教科「表現」が指導の目標に掲げられ、中学校入学時の生徒の変化を感じる。もじもじとして人前に出ると顔を赤らめ、緊張してふだんと違う姿を見せた10年前の生徒たちとは明らかに異なる生徒の姿がある。

英語の時間ではALTに話しかけられても動じず、スピーチで英語が出てこなければ身振り手振りという「技」を使って切り抜ける。笑いをとることも忘れない。ともすればこの世代の子どもたちに頼もしさも感じ、小学校のご指導の賜物と頭が下がる。

表現活動が定着するにしたがって注目されてきたのが「評価」である。「表現」を評価する物差しとしてループリックが使われ始めた。脇田(2014)はループリックの長所として「評価基準が明確なため、的確な評価ができる」「教師はぶれない評価ができ、評価される生徒にとっては客観的に評価されているという安心感が生まれる」「保護者も納得できるような総括的評価ができる」「生徒がさらに高いレベルをめざす学習動機につながりやすい」と述べている。同氏は短所として「作成が困難であること」を挙げている。とはいえ、それを明確に作成すると学年を複数で教える場合、「評価にぶれがなくなる」とプラスに評価している。

筆者も作文活動でループリックを作成した。実施してみてループリックのメリット・デメリットとして考えるべき事項に出会った。

作文活動でand, but, so, then, when, ifなどの既習の接続詞を使用して重文・複文を作成してほしいという意図があり、ループリックで文言の中に「and, but, so, then, when, ifなどを用いて…」という項目が加わった。授業と評価が一体化したわけである。予想通り、生徒はループリックを見ながら考え、接続詞が入った文が産出された。しかし、しばらく採点して「これは…」と思ったことがあった。

第一に学習がとても進んでいた学習者群があまり量

を書かなかったことであった。つまりループリックの最高得点以上のパフォーマンスはしなかった、ということである。どうやら「最高得点とれたらそれでよい」と自ら天井を決めてしまったらしい。そこで4段階スケールの4(満点)で、通行手形を渡して次なるステージに進ませ、評価基準を関心・意欲でプラス点を与えるように変えた。結果、手形をもらった生徒はほぼ実力通りのパフォーマンスをしている。

第二にスペリングの誤りに無頓着になる傾向があることが伺えることである。これはループリックに「語いを正しく書く」という項目がなかったことと関連するかもしれない。ループリックの文言は「適切に表現をし…」だったのである。辞書を引いて正確に書くというよりも内容を表現することに集中する姿が浮かび上がった。語いの正確さを測る評価を別に行うこととなった。

ループリックは表現活動を見る評価スケールである。正確さを加えると項目が複雑化し、またパフォーマンスの質を段階的に評価する(松下, 2009)という趣旨に合わない。細かな修正を続ける必要とループリック以外の評価と抱き合わせて点数化する必要がある。

また、人間教育の点で留意しなければならないところはないだろうか。「〈得点になること・ならないこと〉で取り組み度に差をつける」という姿勢を育てていないか、という点も考えて項目立てをし、評価の多様な方法を試みる必要がある。

かつて日本人の作り出す「もの」は完璧で美しい、と言われた。表現ができずに悔しい思いをした先人たちの反省からパフォーマンスを強化した経緯はもっともなのだが、美德である「人としての姿勢」も崩さないように教育に取り組みたいものである。

参考文献

松下佳代(2009)『パフォーマンス評価』日本標準ブックレット
脇田誠(2014)「生徒の学習動機を高め、適切に評価するためのRubricsを活用した評価方法」『STEP英検情報』6-7月号 p.16, 日本英語検定協会
"Rubistar", <http://rubistar.4teachers.org/>

山岡俊比古先生のご逝去を悼む

神奈川県立柏陽高等学校総括教諭・
日本大学総合社会情報研究科博士後期課程在籍 甲斐 順



平成25年9月26日木曜日、学校から帰宅し、夕食を終えてからパソコンに向かうと、兵庫教育大学大学院在学時にお世話になった山岡俊比古先生の訃報が入ってきました。お元気でお過ごしのこととつゆも疑わずに日々を送っていただけに、その夜は驚愕し悲嘆に暮れました。

私が兵庫教育大学大学院に在籍したのは平成11年4月から平成13年3月までの2年間で、山岡先生には修士論文の指導教官としてご指導を仰ぐとともに第二言語習得研究のイロハを懇切丁寧に教えていただきました。

先生は博学でシャープ、とても几帳面な方でした。研究室は書籍の宝庫で、修了生が必要な書籍や資料はすぐに先生が取り出してくださり、まるでドラえもののポケットのようでした。ゼミでは最新の第二言語習得研究の英文書籍を取り扱い、院生にはパッセージごとに音読、日本語による要約が課され、先生からのコメントをいただくというスタイルで進みました。1章を読み終えるのに、午後1時から始まり、途中休憩を含めて午後6時過ぎ、最も遅いときで午後8時近くまでかかったこともありました。

山岡先生の研究熱心なご様子は、土日、祝日にも明かりが灯っていた研究室が物語っていました。そんな先生も、秋には同僚の二谷廣二教授とキノコ採集に大学近くの森をよく散策されていました。お酒をこよなく愛飲されていたこと、一緒にカラオケに行かれたこと、愛煙家でありながら禁煙に努めておられたこと、大の広島カープファンでチームが低迷している時期には「私が監督をやっている方がよほどまだ」とおっしゃられていたことなど、様々な思い出が蘇ってきます。

山岡先生について語らせていただくときに、『第2言語習得研究(新装改訂版)』(1997桐原ユニ)を抜きにはできないでしょう。今では日本語で書かれた第二言語

習得研究関連の書籍が数多く出版されていますが、当時としては日本語で書かれたこの分野の書籍がほとんどなかっただけに大変画期的であったと言えます。第二言語習得研究の草創期からご著書出版当時に至るまでの推移を敷衍して論じられたご著書は、第二言語習得研究の開拓者の片鱗を見せると同時に、山岡先生の心血を注がれた偉大な業績を示す大著であったことは間違いありません。

山岡先生のご退職を記念して、平成26年3月に刊行される予定だった論文集を待たずに他界されてしまい、大変残念であり、無念です。この論文集は、『第2言語習得研究と英語教育の実践研究－山岡俊比古先生追悼論文集－』(開隆堂)と書名を変えて先般出版されましたが、第二言語習得研究、英語教育の分野で活躍されている方々が論考を寄せており、山岡先生が研究者だけでなく、教育者としてもどれほど大きな存在でおられたか、改めて実感します。

個人的には、平成16年8月長野で行われた全国英語教育学会でお会いしたのが最後となってしまいました。髭がよくお似合いで、柔和で温厚な山岡先生のお姿にもう接することができないというのがいまだに信じられません。享年64歳。まだまだこれからというときに、残念至極です。ご冥福をお祈りするとともに、山岡先生の遺志を受け継ぎ、日本における第二言語習得研究に少しでも貢献できるよう努めていく所存です。合掌。

好評発売中

第2言語習得研究と英語教育の実践研究

山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会 編
A5判/352ページ ■定価 本体3,000円+税
故山岡俊比古兵庫教育大学教授の教えを受けた大学院修了生が、その学恩を偲んで執筆・編纂。第2言語習得研究と英語教育論の最先端を論じた全24編の論文集。

小学校英語教科化を控えて

奈良県五條市五條西中学校教諭 神山 豊彦



2013年12月に文部科学省から、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表された。2020年までに小学校の5・6年生で英語が教科化されることになる。

現在の外国語活動の目標は、「コミュニケーションの素地を培う」ことであり、言語習得ではない。それゆえ、教科書は作成されていない。『英語ノート』や*Hi, friends!*といった教材は作成されているが、あくまで教材であり、授業で使用するかしないかは、現場に任されている。また、外国語活動では、文字指導や文法指導は行われず、成績は数値では表されていない。

将来、教科化される小学校英語の目標は、「読むことや書くことを含めた初歩的な英語の運用能力を養う」ことである。それに伴い、教科書が作成される。授業では、教科書を用いて文字指導や文法指導が行われることになる。成績は数値で算出されると思われる。また、授業数は週3コマ程度(例:2コマ+モジュール授業[15分×3])になる。

数年後に、小学校現場に大きな変化が起こる。5・6年生の児童がこの変化に戸惑うことなく、小学校英語を通して、初歩的な英語の運用能力を養うことができるようになることを強く望む。

小学校英語実現のために体制整備が求められる。

1. 教員養成

学級担任が中心となって小学校英語を指導することになる。専科教員の積極的活用やALTなどの外部人材の活用促進も実施計画に記載されているが、小学校英語の指導の中心は学級担任である。したがって、将来小学校教員となる者には、小学校英語を教える英語力と指導力が必要となってくる。

今後、各大学の小学校教員養成において、小学校英語教科法などの小学校英語の指導に必要な科目が、カリキュラムに盛り込まれることが求められる。

2. 教員研修

2014年度から英語教育推進リーダー中央研修プログ

ラムが実施されている。プログラムでは、各都道府県から推薦を受けた小学校教員が、まず中央研修で「実践のための研修」を5日間受講し、次にそれぞれの小学校で「授業実習」を行う。その後、中央研修で「指導のための研修」を5日間受講する。これらの研修後に、研修参加者は、講師として、地域の中核教員等を対象とした研修を実施する。その後、英語教育推進リーダーとして認証され、各地域で小学校教員を対象に英語指導の講師として研修を実施していくことになる。

プログラムでは、英語力や教授法を学ぶ期間は10日間である。10日間で、英語力を高め、教授法を理解することは容易ではない。研修参加者には、事前に、英語力を高めるための学習と教授法に関する基本的な知識の習得が望まれる。

3. 教科書

2017年度に教科書作成、2018年度に教科書検定、2019年度に教科書採択、そして2020年度に教科書配布となる。

この予定では、2020年度の小学校英語科実施までに、教科書を使っての授業研究や、その研究結果に基づく、小学校教員を対象とした研修が、十分に実施されない可能性が考えられる。小学校教員が、自信を持って児童に英語を教えることができるためには、授業で実際に使う教科書を用いた研修の機会を充実させることも大切ではないかと思う。

小学校英語科実施により、5・6年生の児童が英語を使って、かんたんなコミュニケーションを楽しむ姿が見られることになる。

これを実現するためには、小学校の先生方の負担が増えることとなりますが、研修等に参加され、英語力と指導力に磨きをかけ、自信を持って英語の授業を行うことができるように準備を整えていただくことを願っております。

英語村という非グローバル的発想 英語村=公的ディズニーランド!?

インフルエンザで丸3日寝込んだ年末。復活初日、見逃したニュースを読み返していると、英語教育政策に関する1つのニュースが病み上がりの私を「またか…」という暗鬱な気持ちにさせた。2015年クリスマス、東京都は「東京都長期ビジョン」を発表。小中高生の国際感覚を育成する政策の一環として、児童生徒らが英語だけを使い生活する「英語村」（仮称）を設置するという。

英語教育に携わる先生方ならおわかりだろうが、英語をモノにするなら長期戦は必至だ。数日間の寝泊りでは持続的効果は薄く、楽しい思い出だけが残るイベントにすぎない。もちろん、頭ごなしに全否定するつもりはない。事実、日常的に英語を使う必要性が乏しいEFL環境にある日本において、英語漬けの生活が仮想体験できるのは魅力的だ。たとえ目立った英語力向上がなくても、学習への動機づけや異文化体験という意味では、実質的なメリットも多い。

「英語村」を真に価値ある施設にするには、充実したプログラムこそ不可欠だ。異国情緒あふれる箱物だけでは「公的ディズニーランド」と変わらない。本気で「グローバル人材」を育成するなら、ハード面以上にソフト面に期待したい。

◆「グローバルな舞台」は「村」か

…と、以上は割と目にする指摘だろう。しかし、「英語村」に対する私の違和感は、もっと根深い深層心理の次元にある。

まず「英語村」をイメージしてほしい。宗教や国家を超えた名曲“Imagine”の世界、肩を並べて“We Are the World”を歌っている有名アーティストたちの姿。おそらく、こうした牧歌的な雰囲気包まれた英語による交流、温かいつながりを思い浮かべらるだろう。

しかし、そもそも「村」とは、血縁なりご近所さんなり、つながっていることが必然である集まりだ。確かに、そこで生まれ育った「村人」にとっては居心地がよいが、一方、よそ者には排他的で閉じられた空間になりやすいのも然り。

私たちが英語を携え飛び込んでいく「グローバルな舞台」とは、「村」というよりむしろ「都市」に近い空間と私は捉えている。

虫たちが光に集まるように、都市とは魅せられた人々が多方面から集まる雑多な場所である。村にあった有機的関係の基盤はなく、都市の住人は孤独だ。だからこそ市民らは、「そもそもお互いに違う」という前提から出発し、自力で一から人間関係を築く。また、多種多様な価値観が混在するため、互いの利害や意見を民主的に熟議、調整しながら社会を編んでいく。

英語「村」という発想こそ、私たちが引きずっている「非グローバル」な村人メンタリティを露呈しているのではないだろうか。

◆「I」として舞台へ！

「グローバルな舞台」に上がるには、日本という安全圏から心理的に離脱し、最高の笑顔で“Hi!”と語りかけられる保証なき土地へ裸一貫で乗り込む覚悟が必要である。それは、相手との関係に合わせて変化する日本語の「私」というよりも、「I」という普遍的一人称の勝負だ。積極的に意見を述べ合い、新たなアイデアを創造する共同作業。これこそが、地球「市民」に求められるコミュニケーションだろう。

かつて人々は鉄道に乗り、故郷への未練を断ち切って、不安を胸に憧れの大都会へと乗り込んだ。頼る者もなく自らの手で金を稼ぎ、ときに騙されつつ素晴らしき出会いに助けられ、次第に土地の人になっていった。現代における英語「都市」もそのような場に近い。それこそ「生きる力」が試される。

設置される「英語都市」がこんなエキサイティングな冒険を提供しようものなら、なかなか期待大である。あえて注文をつけるなら、「英語」都市ではなく、「多言語」都市だとなおよいのだが、長くなるのでその話はまたいつか。

（福岡教育大学准教授 吉武 正樹）

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。掲載号につきましては、原則として原稿到着時にご相談させていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。